

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：82611

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K20102

研究課題名（和文）アディクションとジェンダーの相互作用：女性薬物使用者の回復・再生・変容

研究課題名（英文）Interaction of Addiction and Gender

研究代表者

菊池 美名子（Kikuchi, Minako）

国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所 薬物依存研究部・研究生

研究者番号：80769836

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、(1)日本における女性アディクション当事者の生きられた経験と抱える困難とはどのようなものか、その実態を明らかにするとともに、(2)女性たちの回復・再生・変容についてジェンダーとの相互作用の側面から検討を行った。(1)では、薬物依存症専門外来及び更生保護施設で処遇/介入を受けている女性薬物使用者、そして女性依存症者回復支援を行う民間非営利組織の利用者及びスタッフへの半構造化インタビュー調査データの質的分析を行った。(2)では、アディクションと関連した日本のポピュラーカルチャーの分析のほか、当事者主体の多様な実践、抵抗とジェンダーの相互作用について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アディクション研究におけるアンドロセントリズムが批判されて久しいが、日本では未だ女性当事者の実態把握や回復支援のための研究の蓄積が浅い。これに対し本研究は、周縁化されてきた女性たちの経験に焦点を当て、日本の薬物関連問題研究にジェンダーやセクシュアリティの視点を組み入れた点に学術的意義がある。さらに病理化や医療モデルを相対視し、学際的かつ社会に開かれたアディクション研究を行うことで、精神医学や矯正心理学主導で行われてきた従来の研究では十分検討されてこなかった当事者主体の多様な臨床実践や、健全主義と連動した母親規範による女性当事者たちの葛藤の経験と抵抗のプロセスを明らかにした点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research explores two main aspects: (1) the lived experiences, needs, and social barriers faced by women with addiction in Japan, and (2) the recovery and transformation processes of these women and how gender interacts with these processes. For the first aspect, the study conducted a qualitative analysis of semi-structured interview data from female drug users admitted to medical institution and rehabilitation facility, as well as interviews with users and staff of non-profit organization that support the recovery of female addicts. In addressing the second aspect, the research analyzed Japanese popular culture related to addiction and explored how gender and various practices of resistance and recovery interact based on the perspectives gathered from the individuals interviewed.

研究分野：総合人文社会

キーワード：アディクション ジェンダー 依存症 薬物使用 リカバリー・カルチャー

1．研究開始当初の背景

近年、日本国内で薬物使用に関連する様々な問題に多大な社会的関心が注がれるようになった。それに伴い、厳罰化ではなく適切な介入による回復支援の必要性が議論されると共に、回復支援モデルやプログラムの開発・導入と、その評価や研究が急速に進められている。

一方、それらの支援モデルや研究は、暗黙のうちに男性薬物使用者の回復支援が主に想定されてきた。特に日本では、女性薬物使用者の実態把握や回復支援のための研究は、ほとんど手つかずのまま残されている。

さらに、諸外国の先行研究や支援現場からは、女性の薬物使用者は男性と比べてトラウマ体験経験率が高く、身体的・精神的問題の併存や、短い教育年数、不安定な雇用等の生活上の困難を抱えやすいために、支援が難しいこと、薬物使用に至る動機や経路、関連問題にはジェンダー差が大きいことが報告されている。

こうした中、日本における(1)女性アディクション当事者の生きられた経験と抱える困難とはどのようなものか、その実態を明らかにし、(2)それらをふまえた「支援」や「回復」のあり方について検討することが、喫緊の課題となっている。

2．研究の目的

(1) 日本の薬物関連問題研究にジェンダーやセクシュアリティの視点を組み入れること：周縁化されてきた女性薬物使用当事者の経験に焦点を当て、薬物関連問題研究の拡充を目指す。

(2) 病理化や逸脱化を相対視し、学際的かつ社会に開かれたアディクション研究を行うこと：精神医学や矯正心理学主導で行われてきた従来の研究では十分検討されてこなかった、社会構造的背景などに着目し、また多分野の専門家と当事者運動の研究協力者が加わることで、より社会や文化に開かれた分析が可能となり、現実的な「処方箋」までを論じることができる。

(3) 政策提言、地域の取り組みへの助言、質問紙改訂の基礎資料となること：(1)や(2)に基づいた、政策立案や地域における実践に対する提言が可能となる。また、来たる量的調査実施に向けて、既存の質問紙にジェンダー・センシティブな項目を導入するための基礎資料となる。

3．研究の方法

(1) 研究代表者（社会学）をコアメンバーとし、ジェンダー・セクシュアリティ研究関連、臨床家、表象・メディア関連、当事者研究関連の研究協力者を迎え、文献研究、インタビュー調査と質的データ分析、事例検討会、共同研究会議と理論的討議、文化的表象の分析を行った。

(2) また、年間テーマを以下の通り定め、各年度年間テーマを中心として研究を実施した。

<令和2年度> 薬物使用関連問題におけるジェンダー・セクシュアリティ理論の射程

<令和3年度> アディクション・批判的障害学・インターセクショナルリティ

<令和4年度> アディクションのリカバリー・カルチャー

<令和5年度> 女性アディクション当事者の回復と変容

4．研究成果

(1) まずは国内外の関連文献整理とオーバービュー、分析を行った。国内における女性の薬物使用に関する学術文献は数が少なく、その大部分が臨床領域の研究に限られている。そのため、海外の先行研究を中心に文献収集・整理し、レビューを行った。

一年目は社会学、人類学、歴史学、フェミニスト犯罪学、二年目は批判的障害学やクリップ・セオリー、マッド・スタディーズ、第四波フェミニズムといった思想の新潮流とインターセクショナルリティ理論、三～四年目はリカバリー・カルチャー研究と、薬物使用、精神障害、子育ての交差領域について障害学、批判的障害学、クリップ・セオリー、マッド・スタディーズ、フェミニズム理論の学術文献を中心にレビューした。また、それらの知見と(2)～(4)の調査結果とを接合しながら考察を進めた。

(2) 薬物依存症専門外来及び更生保護施設で処遇/介入を受けている女性薬物使用者への半構造化インタビュー調査データについて質的分析を行い、障害学、批判的薬物研究、インターセクショナル・フェミニズム等の理論を援用しつつ考察を行った。国内学術誌に論文を投稿し、採録された。

女性たちは、薬物を使用することでジェンダー化された社会的・経済的周縁化と暴力、痛みから逃れたものの、社会統制によるハームによって人生は混沌としたものになっていた。今日の犯罪/疾病モデルによる脱スティグマ的な処遇/介入の実践の一部はそうした女性たちの支援ニーズにマッチしていたが、薬物の使用・再使用が余儀なくされる構造的問題は温存されたままであった。社会的・経済的に不利な立場に置かれた人々および暴力被害者の、管理及び再社会化に還

元されることのない、インターセクショナルな視点を重視した支援と研究の枠組みを構想する必要性と重要性が確認された。

(3) 国際共同研究を実施し、自傷行為と関連した日本のポピュラーカルチャーの分析により文化的表象を通じた当事者主体の抵抗の実践について考察した。国際学術誌に共著論文を投稿し、採録された。

本研究では、マンガ、アニメ、ゲーム、ファッションといった日本のポピュラーカルチャーにおける「メンヘラ女子」キャラクターが、アディクションを解釈し、意味づけし、経験するための新たなことばやイメージを提供していることを明らかにした。またそうした語りが、臨床的言説と同様に、われわれがアディクションを解釈し、経験していくプロセスに大きな影響力をもつと考えられることから、医療モデルを超えた当事者主体の多様な臨床実践のためにも、こうした文化的表象に着目していく必要性が明らかになった。

さらに、メンタルヘルスと文化的表象、批判的障害学等を専門とする海外研究協力者との意見交換を通して、アディクション当事者の回復・再生・変容、およびその過程で創出される/その過程に影響を与える文化について示唆を得ることができた。

(4) 国内の女性依存症者回復支援を行う民間非営利組織と連携し、特に当該施設の子育て支援プログラムに着目して、当該プログラムおよび当該施設のリカバリー・カルチャーに関する参与観察、プログラム利用者・スタッフの非構造化インタビュー、半構造化インタビュー、帰納的なテーマとパターンの抽出及び質的分析、考察を実施した。コロナ禍の影響を受け、当初予定されていた施設でのグループインタビューをオンラインによる個別の半構造化インタビューに変更したほか、研究代表者のグループミーティング参加をオンラインで実施するなど様々な変更を余儀なくされたが、施設の協力により調査を進行することができた。さらに同施設にて研究説明会およびスタッフらとの共同研究会議を実施した。

本研究において女性たちからは、文化的表象、臨床研究言説、教育言説などを通じた、健常主義と連動した母親規範による葛藤の経験とともに、自らの状況の再定義と抵抗のプロセスが語られた。また、母子の「同居をゴールとしない支援」を実現・強化するための制度的な改革の必要性、そして、障害をもつ子の学業やセクシュアリティに関する問題について、具体的かつ有効な介入方法や実践的スキルに関する知識提供、意思決定プロセスのサポートといったニーズがあることが明らかになった。さらに、当該施設における母子支援の取り組みは、個々のケースワークにとどまらず、障害学研究者をスーパーバイザーに迎えたプログラム等のさまざまな活動の導入や、施設スタッフ、その他の支援者、協力者たちの協働の中で、独自のリカバリー・カルチャーを構成し、母親たちのニーズを支えるものとなっていた。本研究で明らかにされたニーズやリカバリー・カルチャーをふまえた取り組みは、「自らもケアが必要なひとりの人間(親)が、自分をケアしながら、多様な他者(子)のケアを行うということ」という、アディクションの問題を越えたテーマを提示するとともに、現代社会においてさまざまな形で子育てをする、すべての「親」として生きる人々の状況を改善し、子育てのしやすい社会の基盤作りにも貢献するものであると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 菊池 美名子	4. 巻 34巻2号
2. 論文標題 書評 中村英代著『依存症と回復、そして資本主義 暴走する社会で 希望のステップ を踏み続ける 』（光文社、2022年）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 79-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 菊池 美名子、近藤 あゆみ、松村 美穂、森 美緒、大嶋 栄子	4. 巻 第18号
2. 論文標題 女性薬物使用者のニーズとジェンダー 薬物依存症専門外来利用者及び更生保護施設入所者の語りから	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 障害学研究	6. 最初と最後の頁 169-198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 菊池 美名子	4. 巻 50巻5号
2. 論文標題 あなたが知るべきことと、わたしが書かないこと 薬物研究の認識論（エピステモロジー）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 134-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Seko Yukari、Kikuchi Minako	4. 巻 7
2. 論文標題 Mentally Ill and Cute as Hell: Menhera Girls and Portrayals of Self-Injury in Japanese Popular Culture	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Frontiers in Communication	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fcomm.2022.737761	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 菊池 美名子	4．巻 49巻10号
2．論文標題 メンヘラ少女たちのオートセオリーのために	5．発行年 2021年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 142-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 菊池 美名子	4．巻 増刊13号
2．論文標題 トラウマ・スタディーズと批判的障害学を接続する	5．発行年 2021年
3．雑誌名 臨床心理学	6．最初と最後の頁 129-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 菊池 美名子	4．巻 49巻2号
2．論文標題 ファルマコン(薬=毒) ジェンダー化された狂気の系譜とレジリエンスの政治	5．発行年 2021年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 145-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 9件／うち国際学会 0件）

1．発表者名 菊池 美名子
2．発表標題 複雑性PTSDと心的外傷後成長~トラウマインフォームドケアの視点を学ぶ
3．学会等名 性暴力救援センター・東京 第4回二次受傷対策研修（招待講演）
4．発表年 2024年

1．発表者名 菊池 美名子
2．発表標題 DV・性暴力とトラウマ
3．学会等名 NPO法人女性の安全と健康のための支援教育センター DV・性暴力被害にかかわる支援者のための研修講座2023（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 菊池 美名子
2．発表標題 PTSDと心的外傷後成長~トラウマインフォームドケアの視点~
3．学会等名 公益財団法人せんだい男女共同参画財団 性暴力被害者支援スキルアップ講座2023（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 菊池 美名子
2．発表標題 DV・性暴力とトラウマ
3．学会等名 NPO法人女性の安全と健康のための支援教育センター DV・性暴力被害にかかわる支援者のための研修講座2022（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 菊池 美名子
2．発表標題 トラウマインフォームドケア被害者と支援者がともに成長するー
3．学会等名 公益財団法人せんだい男女共同参画財団 性暴力被害者支援スキルアップ講座2021（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 菊池 美名子
2．発表標題 DV・性暴力とトラウマ
3．学会等名 NPO法人女性の安全と健康のための支援教育センター DV・性暴力被害にかかわる支援者のための研修講座2021（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 菊池 美名子
2．発表標題 トラウマインフォームドケア 社会学の視点から
3．学会等名 公益財団法人せんだい男女共同参画財団 性暴力被害者支援スキルアップ講座2020（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 菊池 美名子
2．発表標題 DV・性暴力とトラウマ
3．学会等名 NPO法人女性の安全と健康のための支援教育センター DV・性暴力被害にかかわる支援者のための研修講座2020（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 菊池 美名子
2．発表標題 性暴力被害者・児のトラウマについて
3．学会等名 NPO法人性暴力被害者支援センターちさと 第8回性暴力被害者支援員養成講座（招待講演）
4．発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1．著者名 青山 薫、赤枝 香奈子、赤川 学、秋月 弘子、秋林 こずえ、浅倉 むつ子、東 園子、足立 真理子、阿部 浩己、天野 知香、新井 美佐子、粟屋 利江、飯田 貴子、飯田 祐子、池田 恵子、池田 弘乃、池田 光穂、池永 肇恵、池松 玲子、菊池 美名子他	4．発行年 2024年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 816
3．書名 ジェンダー事典	

1．著者名 原田 誠一、飛鳥井 望、神田橋 條治、岡野 憲一郎、伊藤 絵美、丹羽 まどか、菊池 美名子、細金 奈奈、齋藤 真樹子、杉山 登志郎、斎藤 環、高木 俊介、齊藤 万比古、青木 省三、田嶋 誠一、林 直樹、市井 雅哉、亀岡 智美、千葉 俊周、金沢 徹文	4．発行年 2021年
2．出版社 金剛出版	5．総ページ数 290
3．書名 複雑性PTSDの臨床	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------